



TITLE:

5-5 2回の越冬で感じたこと (5. 南極
観測)

AUTHOR(S):

岩野, 祥子

CITATION:

岩野, 祥子. 5-5 2回の越冬で感じたこと (5. 南極観測). 京大地球物理学研究の百年(II) 2010, 2: 107-110

ISSUE DATE:

2010-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/169888>

RIGHT:

2 回の越冬で感じたこと

岩野祥子 (2005 年卒)

1. はじめに

「京大地球物理学研究の百年」集録続編に南極観測の項目を設けるとのことで、比較的最近の南極について書く機会をいただきました。学問的な内容は他の執筆者の方々が書かれるそうですので、私はそれ以外のことを書かせていただきます。

1 回目に越冬したのは、2000 年 12 月から 2002 年 2 月までで（第 42 次隊）、京都大学大学院博士課程 1 年のときです。私にとっては、天から宝物が降ってきたようなありがたいお話でした。極地研究所の神沼克伊先生の「越冬しませんか？」という言葉に「します」と即答したのを今でも覚えています。あのとき、私を南極へ送り込むために先生方が奔走してくださったのですが、当時は舞台裏のご苦労に思いを馳せるほどの視野を持ち合わせておらず、そのあたりのことに思いが及ぶようになったのはずっと後のことでした。今回、この集録に尾池先生がそのあたりの事情を書かれるということなので、ありがたく読ませていただきます。

2 回目に越冬したのは、2006 年 12 月から 2008 年 2 月までで（第 48 次隊）、現職のアウトドア用品総合メーカー、株式会社モンベルに勤めてからです。寝耳に水のお話で驚きましたが、1 回目同様、越冬予定だった人が急に行けなくなったということで、ピンチヒッターとして行きました。2 回目のお話はあまりにも突然すぎて、いくら南極大好きな私でもさすがにどうしたものか戸惑いました。そうは言っても悩む猶予はほとんどなくて、一晩で意志を固め、家族や会社の了解も次の日には得て、あっという間に南極を目指すことになりました。蓋を開けてみたら別の候補者が出てきていたり、健康診断で再検査になったり、すぐに来てくれてと言われたわりには極地研での受け入れポストが決まらなかったりと、ヒヤヒヤすること満載の心身ともに疲弊した出発までの数ヶ月でした。ただの学生だった 1 回目と立場が大きく違っていたので、誰かが南極へ行くと行ったときに、その人の周囲でどういう風に物事が動くのか、どんなに大勢の人の手を煩わせることになるのか、2 回目はよくわかりました。1 回目のときも当時の自分にとっては一大事でしたが、2 回目を経験してから思い返すと「上げ膳据え膳の南極」という言葉をあてたくなるほどです。というわけで、大層バタついた南極行きとなりましたが、おかげで 2 回も越冬することができ、いい経験をさせていただきました。1 度だけでなく 2 度見るというのは、立場も考えることも大きく違って、大変勉強になります。

2. 砕氷艦「しらせ」

2 回、南極に赴いた中で印象に残っていることのひとつに移動手段の変化があります。初めて南極観測に参加した第 42 次の往路は、日本から南極までずっと砕氷艦「しらせ」で行きました。2000 年 11 月 14 日、晴海埠頭を出港。北緯 35 度を出発し、赤道を通過して南緯 69 度まで、秋から真夏へ戻り、そのあと一気に真冬までという行程を、たった 1 ヶ月半で経験しました。観測隊員が日本から南極まで通して船で行ったのはこれが最後となり、以降は、オーストラリア（パース）までは飛行機、フリーマントルから南極までを「しらせ」で行くようになりました。

私は南極に行くことが好きだし、船の生活も好きなので、日本からの出発が船でなく飛行機になって残念な気持ちになった 1 人ですが、多くの隊員はそうは思わないようです。南極には行ってみたいけれど、そんなに長くなくていいというのが多くの人の考えで、日本の南極観測隊越冬隊の約 1 年半に及ぶ赴任期間は、世界的に見ても長すぎるようです。基地の場所によって、輸送を航空機で行える国もあれば、日本のように船なしには観測が成立しない国もあります。世界中が高スピードで動いている時代ですから、航空機を使えば数日で移動できる距離を、1 ヶ月半もかけて船で行くなんて、ご免こうむりたいというのが一般的な心情でしょう。そんなわけで、日本—オーストラリア間は、船でなく飛行機を使うようになりました。これにより、約 2 週間、南極の赴任期間を短

縮できるようになりました。1 年半という期間から見るとわずかですが、忙しい人たちにとっては貴重な 2 週間なのだと思います。

船にまつわるもうひとつの思い出は、初代「しらせ」の最終航海に乗船したことです。初代「しらせ」は 1983 年に就航し、2008 年に引退しました。私の 2 回目の越冬の復路がその最終航海にあたりました。乗っている間中、いろいろなところで不具合が出て、そのたびに艦内放送が入っていたので、「だいぶガタがきているのだなあ」と実感しながらの航海でした。おんぼろ船だけれど人間と力を合わせて一生懸命航海してくれて、余計に愛着がわいた船です。退役後、一旦スクラップと決まった後で再度チャンスを得て、スクラップを免れウェザーニューズにより第 2 の人生を歩み出せたことは、涙が出るほどうれしいニュースでした。

3. 昭和基地の通信革命

2 回の越冬でもうひとつ印象に残っていることが、通信環境の変化です。最初に越冬した 2000-02 年は、電話、FAX、電子メールに、インマルサット衛星回線を利用していました。ウェブは見られませんでした。電話は 30 分で 1 万円ほどかかりました。E メールは運用形態は常時接続ではなく定期的に接続する形式で、「しらせ」では 1 日 3 回（日本時間の 6 時、12 時、18 時）、昭和基地では 2 時間毎の接続でした。また、Eメールの通信料は送受信とも隊員の負担で、1 キロバイト 10 円ほどかかりました。「子供が生まれました」というタイトルの添付ファイル付きメールが届くと、おいくら万円のメールが来たのかしらとドキドキしました。（実際には 1 メール容量制限があるのでおいくら万円ということはありません。どんなに高くても 1500 円ほどでしたが、ドキドキするには十分な値段でした。）

今はブロードバンドが主流で、従量課金制という概念を忘れている方も多いかと思うので、当時の状況を少し振り返ってみると、国内では 1999 年に ADSL が始まり、Yahoo!BB が ADSL サービスに参入したのが 2001 年 6 月です。2001 年は「ブロードバンド元年」と呼ばれるそうですが、まさに、ダイヤルアップからブロードバンドへの移行が進み、世の中が容量を気にせずにインターネットを使い始めた時代でした。私も国内にいるときには、向上した通信環境の恩恵をしっかりと受けていたクチなので、世の中の流れと逆行するような（実際には遅延ですが）南極の通信システムを、はじめは不便だと感じたものです。ですがそんな環境にもすぐ慣れ、むしろ不便さをありがたがる気持ちも芽生えました。携帯電話を持っていると、つかまりたくないタイミングにもつかまってあーあと思うことがあると思いますが、その逆です。他のことにも言えるかもしれませんが、やろうと思えばすぐにやれてしまう環境にいと、煽られたり焦ったりしますが、どう頑張っても急げない環境にいと、気持ちにゆとりが生まれたり、じっくり取り組めたりします。南極という場所は、こういう何気ない日常の片隅に、日本社会が忘れてしまった時間の過ごし方を再体験するチャンスみたいなものがあって、浦島太郎的で面白いと思いました。

ところが 2006-08 年に再び南極に行ってみると、インテルサット衛星を用いた常時接続回線が導入されていました。電話は極地研究所からの国内通話料金でかけられるし、E メール、ウェブともに使い放題になっていて驚きました。基地内では PHS を持たされるし、無線機を使った通信が不安定になる遠方の野外観測に出かけるときには衛星携帯電話を持っていくようになっていました。もう浦島太郎は許されなくなって、ちょっと残念です（笑）。

インテルサットの導入でもう一つ、忘れてはならないのがテレビ会議システムの利用です。南極と日本の小学校・中学校・高校とをライブ映像で結んで交信する「南極教室」をご存知でしょうか。昭和基地にインターネットが開通するなら、何か新しいことをしよう！と「南極教室」のアイデアを出したのは、2003-2005 年に越冬した朝日新聞の記者です。インテルサットを導入した極地研は、当初、そこまでは考えていなかったようで、やるならどうぞと朝日新聞に投げ、必要な機材などは朝日新聞側で調達して、45 次隊だけのスポット的イベントとして行う予定でした。ところがやってみたら好評だったので、それ以降も当たり前のようになっています。近年は、「南極教室」にとどまらず、アマチュア無線連盟などへのイベント協力、地球温暖化防止フェア、国会議員やモンゴル大統領による昭和基地視察、TV 中継や TV 収録、日本の医師による越冬隊員の医療サポート、国内との打ち合わせなど、さまざまな目的に利用されています。テレビ会議を催すとなると、基地側で

は準備と実施にそれなりの時間とマンパワーが必要で、インテルサットを導入するまでにはなかった仕事が観測隊員の業務のひとつに加わった形です。48次隊では、年間で60回、テレビ会議を実施しました。

4. 苦しかった10年に、喜びを感じたこと

私が初めて南極に行った42次隊(2000-02年)のころ、身近な人たちの「南極観測」に対する反応を見て、南極観測の認知度の低さに正直がっかりしたものです。しかし一方で、南極観測がこれまで国民に対して十分な成果報告を行ってきていなかったことや、南極観測の広報活動も十分ではなかったことに、内部から見て思い当たりました。

南極観測に関わっていると、南極観測が抱える様々な問題に気付くわけですが、南極観測は国家事業なのでとにかく規模が大きく、個人の力では何ともならないことばかりです。私は南極のことが大好きで、南極観測の重要性も人よりは理解しているつもりです。南極観測の将来について考えることもそれなりにありました。けれど、考えているともどかしい気持ちになりました。日本が南極観測を始めた初期のころの勢いは当然ないし、南極に行く隊員たちの情熱もそれほどでもないし、大切な事業をしているわりに、関係者の熱意も社会的な認知度も中途半端。この状態でいつまで続けられるのだろうと不安になりました。「南極観測が始まった初期のころのような、すごい人たち、カリスマ、西堀栄三郎さんのような英雄が現れないだろうか。誰かこの、行くことも戻ることもできないような状況を打開してくれないだろうか」と他力本願に思ったりしました。

私は2000年からの10年ほどの南極観測のことしか知りませんが、この10年で、南極観測はひとつの節目を通過したように思います。2002-04年ころに、「しらせ」後継船の建造問題がありました。「しらせ」後継船の予算は、2002年の文部科学省予算請求では計上すらされず、翌2003年も財務省原案には盛り込まれずに、復活折衝でようやく盛り込まれた状況でした。南極観測の継続が危ぶまれた時期で、極地研が真剣になって広報活動に取り組み始めたのはこのころからだと思います。「しらせ」後継船予算問題では、南極観測の初期を支えた南極OBたちが立ち上がって、集会を開いたり、政府に掛け合ったりしました。

この10年を振り返ると嬉しい気持ちになるのですが、その理由は3つあります。1つは、やっぱりOBがやってくれたということです。肝心なときに、迅速に立ち上がって行動してくれたことがすごく嬉しかったです。南極の初期を支えたOBたちが、彼らにしかできないことをまさにやってくれたこと。日本の南極観測を築き上げた世代のパワーを感じます。これは、南極観測の将来を担う世代として、本当に心強く嬉しい出来事でした。

もう1つは、極地研が広報活動に真剣になって取り組んだことです。宇宙飛行士の毛利衛さん、作家の故・立松和平さん、登山家の今井道子さんが昭和基地を訪問したのは、その現れのひとつです。彼らが昭和基地を訪問したのは2007年1月でした。48次隊の最初の夏でしたので、昭和基地でご一行をお迎えしました。短期間の南極滞在中に、昭和基地だけでなく、「しらせ」を訪問したり、「しらせ」のヘリコプターで沿岸露岩域を訪れたりされました。過密スケジュールの中、各観測担当者から観測の話を直接聞いたり、パーティやバーで観測隊員との交流をはかりながら、お三方とも、短い時間にたくさんのこと取材しておられました。余談ですが、48次隊のバーの名前は、毛利衛さんに書いてもらった色紙のことが「地球まほろば」にちなんで「まほろBar」と名づけました。

立松さんは、帰国後早急に、「南極で考えたこと」という本をまとめられました。南極訪問から1年たたない10ヵ月後にその本はできあがり、49次隊が昭和基地入りするときに著書が届けられました。その素早さと、作家の仕事ぶりには感激しました。帰国後、立松さんの講演会を聞きに行った時、南極とは全く関係のない催しでの講演で、なおかつ南極訪問から2年くらい経っていたのに、あの話題豊富な方がなお南極の話をされるのを聞いて、驚くと同時に大変ありがたく思いました。2010年2月の立松さんの急逝は、隠れファンだっただけに、大きなショックです。それにしても、極地研の広報室はインパクトのある仕掛けをしたと思います。毛利さんたちの南極訪問だけでなく、近年の広報誌、イベント開催、メディア露出、講演活動のサポートを見ても、この数年で極地研は広報活動を大きく見直し、実行に移していることが感じられます。

最後の1つは、南極観測自体が持つ運を感じたことです。この10年、南極観測は苦しかったと思います。国民の認知度は下がっていたし、後継船の予算は下りないし、南極観測自体の存続をあらためて問い直された時期だったと思います。この苦しい時期、関係者が粛々と業務を遂行していく中に、インテルサットの導入による昭和基地の通信革命がありました。それが国内でのブロードバンドの普及とうまくリンクして、南極からの情報発信が南極観測の広報活動に大きな役割を担ったと思います。南極に赴く隊員ひとりひとりの広報力もアップしていて、越冬中の新聞や雑誌への記事投稿や、ホームページ、ブログを用いた情報発信などは、近年では当たり前に行われていました。

後継船予算問題の時期には、それに呼応するようにNHK放送開始50周年と、朝日新聞創刊130周年があり、両機関とも越冬取材をして南極広報に一役買いました。2007年に南極観測50周年を迎えたのも、南極関係者がひとつになり、気合いを入れ直す好機だったといえます。これら一連のことを見ていると、南極観測には運がついていると思えました。南極観測が始まったときから、南極観測には運がついている。その運の強さが今もしっかり生きていると感じました。

南極という大きすぎる対象に接し、思いは地球という星のことにまで及んだけれども、かえって自分のちっぽけさ、非力さに呆然とした初めての南極越冬から10年。自分自身も少しは成長し、焦らず続けることや、見守ること、待つこと、我慢することも覚えた10年。この10年、自分自身が南極で過ごした2年半ほどの期間も含めて、中から外から南極観測を眺めていて、南極観測は大丈夫だなと思いました。

5. 京大関係の南極参加者

最後に、南極関係で私がよく知る京大関係者のことに少し触れて終わりたいと思います。本集録にもリストがありますが、南極観測に参加した京大関係者の多さには驚きます。私の越冬中や、越冬前後だけでも多くの京大関係者がいました。いちばんよく知っているのは、42次隊と一緒に越冬した藤田信幸さんです。藤田さんとはクラスメイトでした。同じ時期に2人分のポストを用意し、学生を2人同時に南極で越冬させるなんてことは、京都大学だからこそできたことなのではないかと思います。42次隊では藤田さんが最年少、私の下から2番目でしたが、社会人の怖いお兄さんたちにもまれながら、南極生活をそれなりに楽しく送れた背景には、よく知る同級生と一緒に越冬している心強さもありました。

42次隊では、他に、夏隊に石川尚人さんがいました。石川さんはアムンゼン湾で調査する地学チームだったので、誰よりも早く船を降りて調査地域に入りました。南極の中でも特に風の強い地域に滞在し、2ヶ月にわたり野外調査を行ったタフな人です。

そのほか、測地学講座の先輩の土井浩一郎さんは、41次越冬隊だったので、42次越冬隊として昭和基地で観測を引き継ぎました。「しんど」が口癖の、のんびりした雰囲気の人です。どんなに大変でも、「ああ、しんど」で結局乗り切ってしまう印象があります。極地研におられるので、2回目の南極の時も何かとお世話になりました。

夏隊で3回南極観測に参加されている戸田茂さんも、南極でよく一緒になります。私が42次越冬のとき、戸田さんは43次夏隊で南極へ来られ、大陸上での人工地震観測をされました。私が48次越冬のときには49次夏隊として来られて、夏の沿岸露岩域の観測はしょっちゅう一緒に出かけました。戸田さんも大層ユニークな方で、一緒にキャンプをしながら、本当に楽しい毎日を過ごさせてもらいました。

南極で過ごしている間は、特に京大の人だと意識して過ごすわけではありませんが、こうして振り返ってみるとやっぱり京大ってすごいのだなあと思います。南極観測隊として声がかかること、チャンスがあること、行けば立派に楽しく任務を達成すること。当然と言えば当然かもしれないけれど、これが当然であることがすでに京大特有のことだという気がします。立派な先輩方の仲間に加われて、誇りに思います。